

鬼頭鍋三郎の絵画技法

— 名古屋市美術館所蔵《手をかざす女》の自然科学的調査 —

Painting Technique of KITO Nabesaburo:
Technical Analysis using scientific methods on *Woman with her Hand over Eyes*
in the collection of Nagoya City Art Museum

白河 宗利・成田 朱美・飯田 穂野香・井口 智子
SHIRAKAWA Noriyori, NARITA Akemi, IIDA Honoka, INOKUCHI Satoko

The Institute for the Conservation and Restoration of Cultural Properties in the University of the Arts, Aichi and the Nagoya City Art Museum carried out the joint research “Painting Technique by Kito Nabesaburo and Matsushita Haruo: A Natural Scientific Survey of Works Painted around 1930’s”. In this joint research, we applied natural scientific technique to their works in the collection of the Museum.

This paper is a report of the examination of Kito's *Woman with her Hand over Eyes*. The examination gave us an opportunity to understand the state of the work and the materials used as well as his technique.

The findings obtained in this research will be archived at the Institute and will be utilized for the future research.

【研究の要旨】

本稿は、本学文化財保存修復研究所と名古屋市美術館との共同研究「鬼頭鍋三郎、松下春雄の絵画技法 —1930 年代前後制作作品の自然科学的調査」の報告である。

本稿では、名古屋市美術館所蔵作品：鬼頭鍋三郎《手をかざす女》に自然科学的手法（高精細撮影、特殊撮影、携帯型蛍光 X 線装置、デジタルマイクロスコブ観察による非破壊調査）を応用して、作品の状態や使用された材料を読み解くとともにその技法を明らかにしていく。

また、本研究で得た知見は、本学文化財保存修復研究所でアーカイブ化して今後の修復研究へ繋げていく所存である。

【本研究の背景と明らかにされる内容】

研究対象作品の名古屋市美術館所蔵《手をかざす女》(1934 年)は、鬼頭鍋三郎(1899-1982 年)が第 15 回帝展で特選を受賞した油彩画である。

この作品も含め、鬼頭作品を読み解いていくには、彼が中心メンバーとなって設立した美術研究グループ・サンサシオンの存在は欠かせないだろう。サンサシオンは、1923 年 9 月 27 日に当時名古屋にいた画家を志す青年だった松下春雄、中野安次郎、加藤喜一郎と共に結成され、同年に第 1 回展を開催している¹。

サンサシオンの活動は 10 年程であったが、鬼頭がサンサシオン解散後、すぐに帝展特選を受賞し帝展の代表画家になっていった背景には、このグループでの絵画制作、発表活動による研鑽が大きく影響したはずである。

鬼頭は、サンサシオン設立の年の第 10 回光風会展に初入選、岡田三郎助(1869-1939 年)に師事し、その後は光風会展以外にも中央美術社展、帝展で入選を重ね画家として頭角を現していった。

戦時中には陸軍報道部の派遣画家として中国に従軍する。帰国した翌年の 1945 年(46 歳)に名古屋に戻り、1947 年(48 歳)の第 3 回日展に《椅子による》を出品し、政府買い上げとなる。1953 年(54 歳)には中日文化賞を受賞、翌年から渡欧し、パリのリュウ・ド・ダゲールのアトリエで制作する。帰国後の 1956 年(57 歳)、第 11 回日展出品作《アトリエにて》が日本芸術院賞を受賞し、1963 年(64 歳)に日本芸術院会員となる。

美術教育者としての鬼頭鍋三郎は、1968 年(69 歳)から愛知県立芸術大学の教授となり、1973 年(74 歳)で退官した後も客員教授を続け、多くの後進の指導にあたった。

鬼頭鍋三郎は、女性像を中心に具象表現で描くことを貫いた画家である。

その作品の特色と画面の移り変わりは、戦前の作品では習作的な趣を残す画風であったが、戦後の《裸婦(椅子による)》(1948 年)の頃になるとポーズや画面構成にも柔らかさが現れ、人物像の描写のみならず内面表現に迫るものがあり、《踊り子》(1950 年)、《二人のパレリーナ》(1952 年)などの作品にもこの傾向が見てとれる。1954 年からの渡欧時期に描いた《マドモアゼル M》(1954 年)、《旅舎にて》(1954 年)などは一転して、荒々しいタッチが目立つ作風となるが、これは当時の日本美術界が前衛美術ブームで激動した時代であったことが影響したかもしれない。この傾向は、鬼頭作品の真骨頂といえる舞妓シリーズの前半作品《老松》(1969 年)頃までに顕著にみられるが、《鼓》(1975 年)になると静寂さを伴う画面となる。これは渡欧や前衛美術に少なからず影響を受けながらも、鬼頭自身が「日本人であることを強く意識した表現」にたどり着いた証であろう。

本研究は、2021 年 3 月に名古屋市美術館でおこなった《手をかざす女》(1934 年)の自然科学的調査を基に鬼頭鍋三郎《手をかざす女》の絵画技法を明らかにするものである。

なお、本研究を含む研究成果は、2021 年 9 月 18 日～11 月 14 日に開催された「鬼頭鍋三郎と松下春雄の女性像をさぐる」展(名古屋市美術館)で展示発表された。

＜調査方法＞

■通常光撮影

画面に均一な光を当て、高精細デジタルカメラで全図の撮影を行う。カメラはMamiyaRZ67、デジタルバックはMamiyaZD Back、光源はストロボ（TOKISTAR e-Light m300）を使用。

■側光線撮影

画面のほぼ真横から一方向の光線を当てて撮影する。側光線を当てると、表面のわずかな凸凹が強調され、絵具層の亀裂や浮き上がり、支持体の変形と言った作品の損傷状態が明らかになる。画家の残した筆触や盛り上げなども詳細に観察できる。さらに、画面とは無関係な筆跡が観察された場合、下層に描かれた別の絵を発見することや、部分的な描き直しを推定することができる。

■紫外線蛍光撮影

紫外線は、通常人間の目に見える光（可視光線）よりも短い波長である。紫外線が物質に当たると、人間の目で知覚できる蛍光を発する。このような性質を利用して、表層のワニス層の状態を観察したり、暗く見える後世の加筆部分を見分けたりする。全図および部分の撮影を行った。Kodak 2E フィルターをカメラのレンズに装着し、ブラックライト（TOSHIBA ネオボール5 EFD15BLB-T：352nm）を使用。

■赤外線撮影

赤外線は、通常人間の目に見える光（可視光線）よりも長い波長であり、物質の内部にまで達する。このため、赤外線写真では、油絵具の層を透過して下層にある下素描の線などを観察することができる。ただし、絵具層が厚塗りの場合や、赤外線をよく吸収する炭素を含む黒色以外の色で下素描が行われている場合は判別が難しいことがある。撮影時、カメラのIRカットフィルターを外し、赤外線撮影用フィルター（FUJI FILTER IR76）をカメラのレンズに装着。

■デジタルマイクロスコープによる観察

デジタルマイクロスコープとは、CCD カメラに高倍率レンズを取り付け、PC に接続して調査範囲の拡大画像を観察する機器である。調査現場で複数人が同時に観察しながら討議できるなど、利便性は高い。調査範囲の長さ・面積などの計測も可能である。光源を変えることで側光線観察や、紫外線蛍光観察もできる。光学顕微鏡と違い、ハンディ操作や鏡筒部分を三脚などに設置して様々な角度からや、任意の箇所の観察が可能となる。使用機器はHirox KH-1300H。

■携帯型蛍光X線装置による分析

物質にX線を照射すると、物質に含まれる元素に応じて特定の波長をもつ二次X線が発生する。この二次X線が蛍光X線であり、このX線を分析することで物質に含まれる元素の定性や定量を行う。携帯型蛍光X線装置は、調査現場に持ち込み大型の文化財でも任意の箇所を分析することができる。試料室と一体型のX線装置に比べて空気中の物質の影響を受けるが、試料との間隔をできるかぎり近づけて照射し、ソフトによるデータ処理によって影響を最小限に留めることが可能となる。非破壊で試料を分析できるため、文化財の調査に広く利用されている。Niton XL3t-950Sを使用。



図1 鬼頭鍋三郎作 《手をかざす女》(1934) 191.0 x 129.0mm

【作品概要】

当作品は、鶴舞公園にある名古屋市公会堂のロビーに長く展示され、1978年に名古屋市博物館に移され、さらに1986年に名古屋市美術館に移された。その当時からと思われる額に入れられている。

《手をかざす女》という題名が指すとおり、画面中央に女性が右手を眉の上あたりにあて、手でひさしを作り、画面向かって左を見つめ立っている。女性は両足とも裸足で、コンクリートブロックのようなものの上に右足を乗せている。服装は丸首で前に釦のある、丈の短い濃い青のカーディガンを着て、白地に水色の細い縦縞のマキシ丈のスカートををはいている。さらに、縁が桃色の、白地に水色の細い格子柄のエプロンを付けている。女性の画面向かって右の傍らには寸胴のブリキのバケツが置かれ、あたかも先ほど摘んできたかのような切り花が入れられている。女性が立っている場所は小径なのか砂利も混じった砂の地面で、その奥にコンクリートで低く境が作られ、野原が広がる。野原の奥、水平線上には低木が生い茂っている。置かれたバケツの奥には井戸も見えている。この井戸は制作当時、鬼頭が住んでいた愛知県名古屋市千種区の近所の井戸であることを、特選のインタビューで答えている²⁾。

特選になった画は「手をかざす女」百二十号ですが、働いている女を描きたいと思って最初に洗濯しているところなどを構想に入れていました。ところが制作のため東京へ出発する前日近所で偶然良い井戸を発見してそれから思いついて水を汲んでいる女を描いてみました。四週間位で完成する予定が七週間になり随分苦心しましたが年来の望が達せられたので骨折り甲斐があったと喜んでいる次第です。

現在千種は喧騒とした街並みになっているが、当時はこのようにのどかな光景が広がっていたということを示すうえでも重要な風俗画ともいえる。

なお、1937年に鬼頭が制作した「海辺」（個人蔵）には髪型は違うものの、全く同じ服装をした見返りの女性の姿が描かれている³。

現在は塗布されたワニスの著しい黄変が見られる。画面上部には下方に垂れたような跡があり、そこが濃く黄変している。

目視で確認できる彩色は、白、緑、青、黒、赤（桃）、黄、茶である。

サインが右下に書かれ、黒い絵具で「N.KiTo /（改行）1934」とある。

裏面を観察すると、オリジナルの画布に、さらに画布が1枚重ねられていた。調査によって裏打ちが施されていたと分かった。重ねられた画布は、端の接着が劣化により剥がれていたため、地塗りの施されていない生のキャンバスであることが観察できた。接着剤は茶褐色に変色しており、シート状ではなく、液状のものを塗布した痕跡があった（図2）。



図2 接着剤が変色し裏打ち布が剥がれている

東京上野にある額縁や絵画修復を請け負う、浅尾拂雲堂の3代目、浅尾丁策が『谷中人物叢話 金四郎三代』に手記を残しており、浅尾丁策により修復が施されたことが分かった。

今（1986年）から数十年前の事、先生からのご依頼で作品一名古屋市公会堂にある《手をかざす女》—が大分いたんで居から修理してくれとの事、久し振りにて懐かしい作品に御目にかかった。埃をはらって見ると枠の裏に薄くはなっていたがK・F・ASAOのゴム印がハッキリと認められ一層なつかしかった。キャンバスはブランシュ十一番であった⁴。

木枠の右下には「田園 鬼頭鍋三郎」、左中央には「公会堂所管」と黒書されていた。現在は《手をかざす女》と付けられているため、「田園」が示すのは、タイトルの変更か、「田園」という作品の木枠に張り直したかは不明。

なお、木枠には横方向に3本、中棧があり、楔付きの木枠であった。楔は右下の、下辺に打つ楔が紛失している。

■特殊光画像からの考察

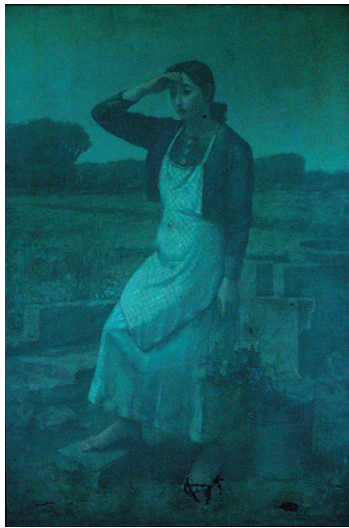


図3. 側光線写真



図4. 紫外線蛍光写真



図5. 赤外線写真

【所見】

側光線写真（図3）を観察すると、空を描いた背景部分に縦方向に幾本もの皺が観察できる。よく見ると画面全体にみられる。裏打ちが施されていることを考慮すると、オリジナルの画布より裏打ち布の縮む力が大きく、皺になってしまっていることが考えられる。

画面全体に画布目が現れているのが分かる。ただし、色相に関わらずハイライト部分は厚塗りになっており、筆跡が目立つ。背景の空は白色絵具を厚く塗っている。空の方が木々の緑の絵具より厚みがあるのが分かる。

また背景の空、向かって右側にワニスの気泡が生じさせたクレーター状の窪みが目立つ。

人物の右腕の肘から二の腕にかけての下部と、左肩と、腹部の輪郭に筆で輪郭をなぞったような筆跡がある。輪郭位置を現在の位置に修正した跡とみられる。

紫外線蛍光写真（図4）通常光では、空部分にワニスマラが著しく見えたにもかかわらず、均一な黄色い蛍光反応が見られた。また、首や腹部、左足先、サインの上などに蛍光せず、黒く映っている箇所がある。この箇所は補彩と考えられる。

均一な黄色い蛍光反応が強く見えるため、絵具自体の蛍光反応は観察しづらいが、白色絵具が黄色く蛍光しているように見える。

赤外線写真（図5）では、下描き線は現れなかった。紫外線蛍光写真で見られた補彩箇所は黒く見えている箇所と顕著には現れていない箇所があった。

赤外線写真では確認しづらいが、通常光と赤外線写真を合成加工した赤外線偽色写真では、エプロンの青い線と、スカートの青い線が異なって表れている（図6）。エプロンは赤く、スカートは青っぽい。これは、同じ色味に見えているが異なる青い色を用いていることを示している。

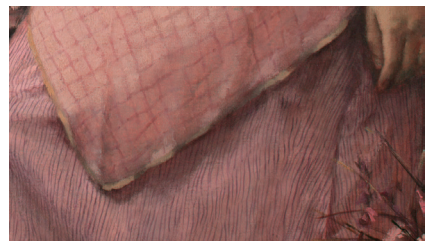


図6 赤外線偽色写真

■デジタルマイクロ스코プによる観察

【所見】



図7 デジタルマイクロSCOPE観察箇所

観察箇所			
1	スカートと足の境	5	ワニスの溜り
2	人差指の先	6	ワニス層の剥落
3	カーディガンの描写	7	虫糞
4	白い付着物	8	補彩箇所

表1. デジタルマイクロSCOPE観察内容

作品の左右の額の入子のキワに、白い付着物がある。入子の内側に塗られた石膏や胡粉が濡れたため、溶けて付着したように見える（図11）。

空部分に集中しているが、ワニスの溜りが点在する（図12）。ワニスの溜りには、気泡痕や、ワニス層に生じた亀裂が観察できる。ワニス層が剥落している箇所からはワニス層は厚塗りであることや、ワニス層の黄化が著しいことも分かる。また、ここで見られる亀裂はほぼワニス層に生じていることも分かった（図13）。

虫糞の付着が見られた（図14）。虫糞が剥落しかかっているものがあつたが、ワニス層ごと剥がれているところを見ると、ワニス層が塗布されたときにはすでに虫糞の付着があつたことが考えられる。

紫外線写真で蛍光し、赤外線写真では黒く反応していた補彩箇所を観察すると、欠損箇所から補彩がはみ出ているように見える。また、欠損箇所のみに充填剤を詰めるのではなく、何らかの絵具を厚く塗ることで欠損箇所を埋め、補彩を行っているようである。またこの絵具は粒子の荒い絵具ということが見て取れる（図15）。

デジタルマイクロSCOPEで技法や状態を確認するため複数箇所観察を行った（表1）。デジタルマイクロSCOPE観察においても下描き線は確認できなかった。

スカートの裾の観察から描き手順が推測された。足の肌を描き、その後にスカートの白色絵具を重ね、さらに青っぽい黒色絵具を肌側のキワに塗り重ね、これがスカートによる影の表現となっている。加えてスカートとの輪郭線を際立たせる表現にもなっている（図8）。

指先の観察でも描き方が明らかになった。肌の中間色を塗り、さらにハイライトを塗り重ねている。その際、爪と皮膚のキワは中間色を塗り残すように、爪の膨らみもハイライトを入れている。最後に指と指の間や、スカートに落ちる指の影として青っぽい黒色絵具で爪の輪郭線を引いている。指先自体が5mmにも満たない幅で描かれていることを考慮してもラフな線で引いている印象を受ける描き方である（図9）。

カーディガンの部分は暗い青と思っていたが、黒色絵具の上に青色絵具を重ねていることが分かった（図10）。

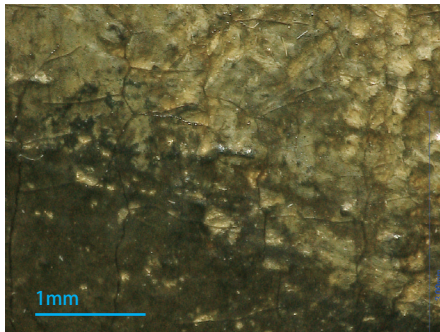


図8 観察箇所1－スカートの裾

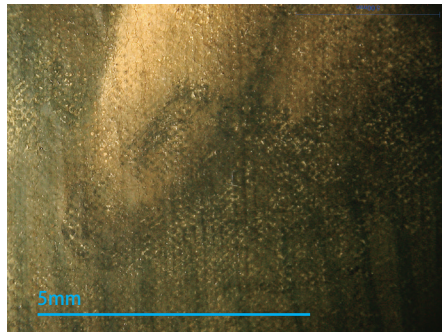


図9 観察箇所2－人差指の爪

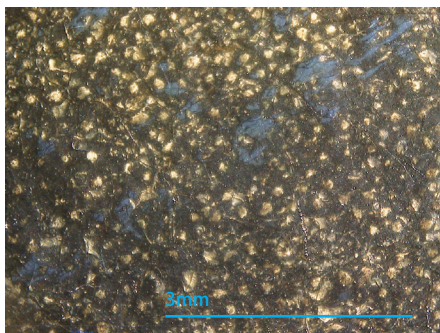


図10 観察箇所3－カーディガンの描写

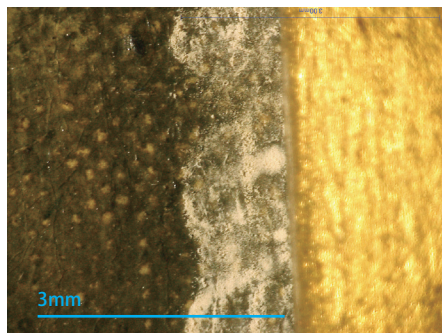


図11 観察箇所4－白い付着物

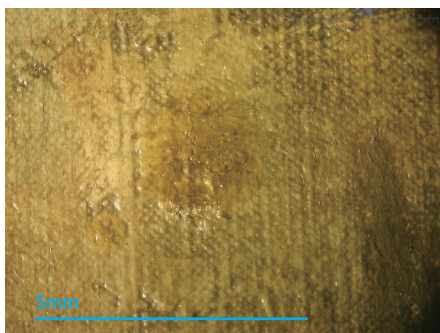


図12 観察箇所5－ワニスの溜り

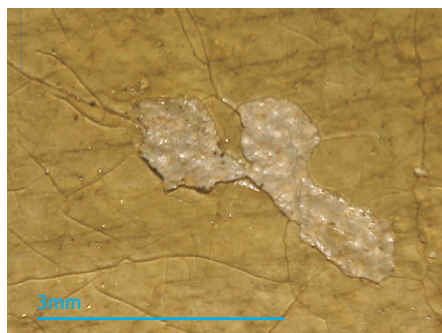


図13 観察箇所6－ワニス層の剥落線

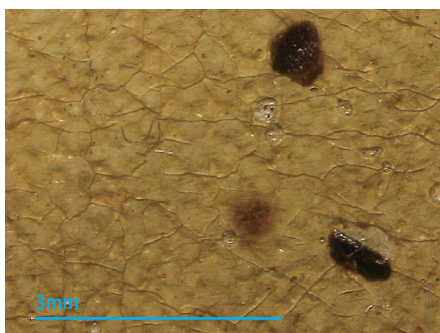


図14 観察箇所7－虫糞

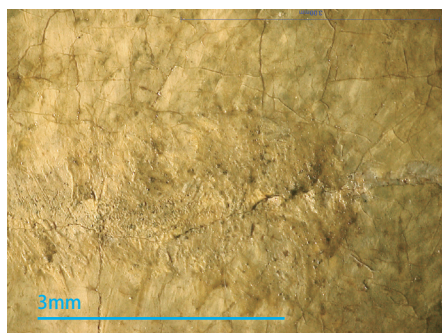


図15 観察箇所8－補彩箇所

■携帯型蛍光X線装置による分析

【所見】



図7 デジタルマイクロSCOPE観察箇所

測定箇所	検出元素	推定顔料名
(1) 空_灰	Fe, Zn, Pb	ジンクホワイト
(2) 髪_黒	Ca, Fe, Zn, Pb	土性系茶褐色 カーボンブラック
(3) 額_ハイライト	Zn	ジンクホワイト
(4) 瞳_黒	Ca, Fe, Zn, Pb	カーボンブラック
(5) 頬_桃	Fe, Zn, Pb	土性系赤褐色 ジンクホワイト
(6) 唇_赤	S, Fe, Zn, Hg, Pb	バーミリオン
(7) 首_補彩	Fe, Zn, Pb	イエローオーカー ジンクホワイト シルバーホワイト
(8) 右腕_青	Fe, Zn, Pb	ウルトラマリン
(9) 釦_白	Fe, Zn, Pb	シルバーホワイト
(10) エブロン_桃	Fe, Zn, Pb	土性系赤褐色
(11) エブロン_青	Fe, Zn, Pb	ウルトラマリン
(12) エブロン_白	Zn, Pb	ジンクホワイト
(13) エブロン_陰	Fe, Zn, Pb	土性系茶褐色
(14) 木_黄	Cr, Fe, Zn, Pb	イエローオーカー
(15) 木_濃緑	Cr, Fe, Zn, Pb	ビリジアン
(16) 木_茶下塗り	Fe, Zn, Pb	土性系茶褐色 シルバーホワイト
(17) エブロン_補彩	Fe, Zn, Pb	ジンクホワイト
(18) 花_赤	P, Fe, Zn, Pb	染料系赤色
(19) スカート_青	Fe, Zn, Pb	インディゴ
(20) 地面_赤茶	P, Ca, Cr, Fe, Zn, Pb	土性系褐色
(21) 地面_補彩	P, Ca, Cr, Fe, Zn, Pb	土性系褐色
(22) サイン_黒	Ca, Cr, Fe, Zn, Pb	カーボンブラック

表2 蛍光X線分析結果

全ての測定箇所に通して亜鉛と鉛が検出された。ジンクホワイトとシルバーホワイトを使った地塗りが施されていると考えられた。

調査箇所ごとの分析結果は（図16、表2）、

(1) 空：灰色箇所。紫外線蛍光写真でも黄色く蛍光して見えたが、亜鉛が検出し、ジンクホワイトが用いられていると考えられた。

(2) 髪：黒色箇所。鉄が多く検出し、色味から土性系茶褐色絵具と考えられた。マンガンの検出はなかったためシエナ系の絵具と考えられた。また、調査に用いた Niton XL3t-950S は、炭素を検出できない機材のため、カーボンブラックがあっても測定はできない。色味からカーボンブラックの使用も考えられた。

(3) 額：肌のハイライト。亜鉛が検出し、ジンクホワイトと考えられた。

(4) 瞳：黒色箇所。鉛の検出が多い。下層の白目の絵具由来と考える。デジタルマイクロSCOPE観察では白色絵具の塗布は見られ、白色絵具のシルバーホワイトが検出したと推測した。黒色絵具は髪と同じ理由でカーボンブラックと考える。

(5) 頬：桃色箇所。鉄と亜鉛が検出。赤外線写真からもライトレッドなどの土性系赤色絵具であると推測した。そして、ジンクホワイトを混色し、桃色を得たと考えられる。

(6) 唇：赤色箇所。水銀を検出。水銀の検出は唇の赤のみである。バーミリオンと考えられた。

(7) 首：補彩箇所。オリジナルの肌の検出元素とあまり変わらない。しかし赤外線にも紫外線蛍光写真でも補彩箇所は現れており、作者による油絵具での補彩とは考えられない。デジタルマイクロSCOPE観察でも充填剤は見られておらず、検出元素からも、充填剤はないことを示す。

(8) **右腕**：鉛を検出した。青色箇所デジタルマイクロスコープ観察で黒色絵具の上に青色絵具を重ねていることが分かっている。黒色絵具はカーボンブラックと考えられた。青色絵具は特有の元素が出てないことや、赤外線偽色画像から、ウルトラマリン（人工）と考えられた。鉛の検出は、彩色絵具に原子量の大きな絵具がなかったため、地塗り層の情報を得たものと考えられる。

(9) **釦**：白色箇所。鉛が検出し、シルバーホワイトであると考えられた。

(10) **エプロン**：桃色箇所。鉄と鉛を検出。土性系赤色絵具とシルバーホワイトの混色と考えられた。

(11) **エプロン**：青色箇所。特有の元素は検出されず、赤外線偽色画像で赤く映っていることから、ウルトラマリンと考えられた。

(12) **エプロン**：白色箇所。エプロンの他の箇所は鉛の検出が多かったが、ハイライトの白を狙ったこの測定では亜鉛の検出が多い結果となった。エプロンの描画は、中間色が塗られその上にハイライトを塗っている様子が見られる。この結果から中間色にはシルバーホワイト、ハイライトにはジンクホワイトを使用していることを示す。

(13) **エプロン**：エプロンの陰影箇所。鉄を検出。陰を表現するための暗色は土性系茶褐色を使用しているようである。マンガンの検出はないためシエナ系と考えられる。

(14) **木**：黄色箇所。鉄の検出があった。色味と合わせて考慮するとイエローオーカーと考えられる。

(15) **木**：濃緑色箇所。クロムの検出があった。ビリジアンと考えられる。

(16) **木**：茶色の下塗り箇所。鉄と亜鉛と、鉛が多く検出された。ここは彩色層の塗り残し箇所、地塗りの上に画面全体に下塗りとして塗布された茶褐色が露出していると考えられた。鉄の検出から土性系茶褐色絵具が考えられた。マンガンの検出はなし。

(17) **エプロン**：補彩箇所。周囲の絵具と同じ検出元素ばかりで、充填剤らしき元素は検出されなかった。デジタルマイクロスコープ観察でも充填剤による充填ではなく、絵具で欠損を埋めた処置と推測される。

(18) **花**：赤色箇所。リンと鉄が検出。鉄は土性系赤色絵具と考えられる。カルシウムとリンが検出すればボーンブラックを示すが、カルシウムの検出が少ない。染料系はリンを検出する場合がある。表面のワニスの蛍光のため、絵具の蛍光が観察できなかったが、染料系の赤色絵具の可能性もある。

(19) **スカート**：青色箇所。特有の元素の検出はなかった。赤外線偽色画像では、赤く映るエプロンやカーディガンの青とは異なり、黒っぽい青に映っている。赤外線偽色画像や特有の元素が出ないことから、インディゴの使用が考えられた。

(20) **地面**：赤茶色部分。リンと鉄が検出。リンの検出の由来は不明。鉄は土性系褐色絵具と考えられた。

(21) **地面**：補彩箇所。周辺の絵具と同じ元素を検出。(17) 同様、絵具で欠損を埋めたためと考える。

(22) **サイン**：黒色箇所。この箇所に特有の元素は検出されなかった。黒はカーボンブラックと考えられる。

【総合的所見】

補彩は欠損箇所よりはみ出して塗布はされているが、わずかにはみ出ているのみで過剰な塗布はなく、こういった処置の仕方を見ると、作者ではなく、修復従事者の手によるものと考えられる。ただし、蛍光X線の分析から、充填剤を入れて欠損箇所を補ってから補彩を行う現在の処方とは異なり、絵具でそのまま欠損箇所を補いつつ、補彩を行っていることがうかがえた。

紫外線蛍光写真では画面全体に均一な蛍光が見られた。しかし、通常光ではワニスの著しい塗むらが見られた。裏打ちや補彩が施されていることから、修復処置の際に黄化したワニスを除去せずに、新たにワニスを均一に噴霧したことが考えられた。厚く著しく黄化したワニスが剥落している箇所があったが、この箇所の紫外線蛍光が周囲と変わらずに蛍光反応をしていたことから、厚く塗られたワニスの上に、修復時に均等にワニスが塗布されていることが考えられた。そして、背景部分のワニスが剥落し、絵具層が露出した箇所は、瑞々しく淡い水色をしていることが分かった。

黄化したワニスを除去することで、現在はただ手を掲げているだけのように見える当作品は、まだ暗いうちから花摘みを始めたが、朝日を浴びたことで花摘みの手を留め、ふと昇ってきた日の方を見つめた、その瞬間を切り取ったということが表れる絵画となることが推測された。ミレーの晩鐘のように直接的に祈りをささげているポーズではないが、あたかも日差しに祈りをささげているかのような壮大さを感じさせる当作品が、帝展で特選を授与されたことに納得がいく。

描画材料であるが、描画内容によって同色でも絵具を使い分けている様子がうかがえた。白色絵具もシルバーホワイトとジンクホワイトの使用が見られたが、中間色や淡い色を作るための混色にはシルバーホワイトを使い、ハイライトにはジンクホワイトを使っていた。絵具の特性を踏まえ、使い分けていたとみられる。また、赤色絵具は、唇のみバーミリオンを使用しており、その他の赤の利用や混色には土性系赤色顔料を用いていた。これは女性の魅力を表現するために、高価な絵具を唇のみに使用したと考えられる。そして、青色絵具はウルトラマリンとインディゴの使用が考えられた。赤外線写真や、赤外線偽色画像を見る限りでは、スカートのみインディゴを使用している。白地に青の縦縞と、同じく白地に青の格子柄という模様違いが隣り合うために、絵具を異なるものにしたことが推測される。

7年後に描いた《赤衣の女》では、白はシルバーホワイトしか使用しておらず、赤はバーミリオンしか使用していない⁵。時代の経過を経て、経済状況が変わったことや、受賞が増え大作家となっていくことへの自負がうかがえて興味深い。

註

¹ 『SENSATION サンサシオン 1923 ～ 33 - 名古屋画壇の青春時代 -』 印象社、2004 年

² 『新愛知』 1934 年 10 月 16 日

³ 『鬼頭鍋三郎展』 朝日新聞社、1991 年

⁴ 浅野丁策 『谷中人物叢話 金四郎三代』 芸術新聞社、1986 年、p.232

⁵ 白河宗利 「鬼頭鍋三郎の絵画技法：愛知県立芸術大学芸術資料館所蔵《赤衣の女》の自然科学的調査」 『愛知県立芸術大学紀要』 48 号、愛知県立芸術大学、2019 年

執筆者

白河 宗利（美術学部油画専攻 准教授）

成田 朱美（文化財保存修復研究所 研究員）

飯田 穂野香（文化財保存修復研究所 准研究員）

井口 智子（名古屋市美術館 学芸課長）